

第十三章 代名詞

レクチャー1

名詞の繰り返しを避けるために用いられる「it」「one」「that」の使い分け。

「それ」という意味になる代名詞の代表的なものに it, one, that があります。
それぞれの特徴とその違いをまとめてみましょう。

(1) 「it」と「one」。

	元の名詞との関係	不可算名詞を受けられるか	冠詞・形容詞を前に付けられるか
it	①直前の(話者の念頭にある)名詞と「 <u>同一</u> 」の(特定の)ものを指す。 ②「the+単数名詞」を表す。複数形は they。 ※可算名詞・不可算名詞どちらも指すことができる。	受けられる	つけられない
one	①直前の(話者の念頭にある)名詞と「 <u>同種</u> 」の(不特定の)ものを指す。つまり別の物(同一物ではない)を示す。 複数形は ones。 ②「a+単数形の可算名詞」を表す。	受けられない	つけられる

では上の表の内容を、一つずつ例文で確認していきましょう。

①元の名詞との関係

(ex) My sister gave me a watch and I lost it [=the watch].

姉から時計をもらったのだが、僕はそれ(同一物)を無くしてしまった

The PC she bought is useful, so I want to buy one [=a PC], too.

彼女が買ったパソコンは使いやすい。だから僕もそれ(同種の別物)を買いたい

上例のように、「それ」が表すものが、元の名詞と「同一(の特定の物)」なら、それは it で、「同種(の不特定)の物」なら、それは one で表します。

②不可算名詞を受けられるか

(ex) Pleasure[←不可算名詞] is important in life. It[=pleasure] makes life meaningful.

喜びは人生において大切だ。それは人生を意味あるものにしてくれる

one は不可算名詞を受けることができません。pleasure(喜び) は不可算名詞なので、it で受けることはできても、one で受けることはできません。

(ex) I like white wine better than red (wine).

[×red one]

私は赤ワインより白ワインの方が好きだ

ワインは液体なので不可算名詞です。したがってこれを one で受けることはできないのです。上の英文の場合、red wine 又は red としなければなりません。

③冠詞や形容詞、疑問詞(which)を前につけられるか

1. one は形容詞を伴って「a(n)+形容詞+one」となることがある。

(ex) I'd like a big one with cream on.

私はクリームのついた大きいのがいい

會形容詞がない場合は I'd like one with cream on. となる。

2. one が限定され、「the+(形容詞)+one」となることがある。

(ex) The lady was taller than the one[=the lady] I met the other day.

その女性は先日私があった女性より背が高かった

I like that dress — I mean the second one from the right.

あのドレスが好き。右から2番目のドレスなんだけど

會もちろん the second itとは言えない。

3. 「形容詞+ones」という場合がある。ones で直前の複数名詞の繰り返すのを避けている。「形容詞」なしで、単独で ones が用いられることは普通ない。

(ex) I chose blue caps, but my brother bought yellow ones[=caps].

私は青い帽子を選んだが、弟は黄色いのを買った

4. 疑問詞の which が前について「which one」という形で用いられることがある。

(ex) Which one do you like better?

どっちがお好きですか

(2) 「that」。

① that も、前出の名詞の反復を避けるために(「the+既出の(単数)名詞」の代用として)用いられるが、後ろに前置詞句や関係節などの限定語句を伴うのが普通。

(ex) The climate of Japan is milder than that of England.

=the climate

日本の気候はイギリス(の気候)よりも穏やかだ

上例の場合、of England という前置詞句によって修飾されているため、it や one ではなく、that が the climate の代用として使われています。

元の名詞が複数名詞の場合は、当然ながら that ではなく those を用います。

(ex) Elephants from Africa are bigger than those from India.

アフリカ象はインド象よりも大きい

上例の場合、元の名詞が Elephants と複数名詞なので、その代用として those が使われていますね。

② that which～ は関係代名詞の what と同じで「～するもの[こと]」という意味

(ex) That which many people say is not always true.

=What many people say is not always true.

大勢の人々が言うことがいつも本当とは限らない

③ those who V～ は「～する人々」という意味。これは「those[the] people who V～」という構文の、people が省略される形

(ex) Those who were present[出席している(形)] agreed to the proposal[提案].

=Those people who were present

出席者はその提案に賛成した

この構文は、who の後ろの「V」がbe動詞だった場合には「people who be動詞」の部分が全て省略されてしまう場合があります。したがって上例は以下のように書き換えることも可能です。

⇒ Those present agreed to the proposal.

「those present」のように、people who were[are]の部分が省略されたと考えられるものが、英文中には多く見られます。例をいくつかあげてみましょう。

(ex) those chosen	「選ばれた人」
those raised in the country	「田舎で育った人」
those involved	「当事者」

したがってまとめると、英文中の代名詞の those は、

1. 「the+既出の複数名詞」の代用としての those

(ex) His eyes are like those [=the eyes] of a lion.
彼の目はライオンの目のようだ

2. 「the people」の代用としての those

(ex) Those [=The people] present agreed to the proposal.
出席者はその提案に同意した

の2種類の可能性があるということになります。

参考 : the one と that の違い

the one も that も、既出の「the+名詞」を指す代名詞として用いられます。その(the one と that の)使い分けは以下の通り(少々マニアックなので参考までに。ただ3.と4.については知っておきたいですね)。

1.元の名詞が「物」の場合は、どちらを用いてもよい。

(ex) This doll is prettier than the one [=that] I bought in Paris.
この人形は私がパリで買ったのよりかわいい

2.ただし that は、元の名詞が「人」の場合には用いない。

the one はそれが可能(つまり「人」を表せる)。

(ex) The man was smarter than **the one**[×that] you were talking of.
その男は、君が話していた男より計算高かった

3.the one は可算名詞を受ける。不可算名詞を受けることができない。

(ex) The coffee my mother makes is better than **that**[×the one] which
you can drink at a cafe.
母が作るコーヒーは、カフェで飲むものより美味しい

上例でも、coffee は不可算名詞なので、それを the one で受ける
ことはできません。

4. 「of～」が後ろにつく場合は that[those] を用いるのが普通。

(ex) The climate of Japan is milder than **that**[×the one] of England.
日本の気候はイギリスの気候より穏やかだ

これは「one of the A(複数名詞):Aのうちの1つ」と混同しないよう
にするためです。

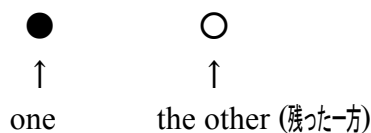
レクチャー2

不定代名詞の相関的用法。

2つ、又は3つ以上のものの中から1つを選んだ後の残ったものを表わす表現は、
代名詞の問題としては最も出題が予想される項目です。

☞ one や the other、all、some、each 等のような、不特定の人や物、あるいは一定でない数量を表わす代名詞のことを不定代名詞という。

(1) one と the other は(2つあるうちの)「(どれか)1つ」と「(残った)一方」。

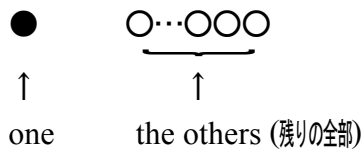


(ex) I have two cats. One is black and the other is white.

私は猫を二匹飼っていて、一匹は黒くて、もう一匹は白いです

one と the other だけは「2者間」において使われるのが特徴です。したがって文法問題におけるこのタイプの問題では、「2」というキーワードが見つかったら the other が正解(one が選択肢になることはまずないので)と思ってまず間違いありません。

(2) one と the others は(3つ以上あるうちの)「(どれか)1つ」と「残りの全部」。

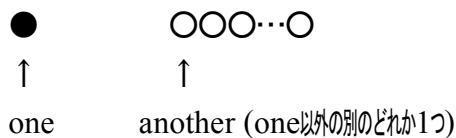


(ex) I like this one, but don't like the others.

私これは好きだけど、他のは全部嫌い

the other(s) の the を「限定の the」と言います。「それで全部」と、残ったものを文字通り「限定[特定]」しているわけです。

(3) one と another は(3つ以上あるうちの)「(どれか)1つ」と「one 以外の別のどれか1つ」。

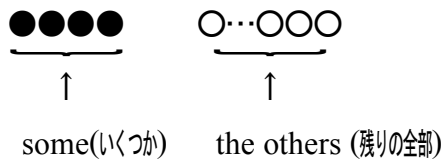


(ex) I don't like this one; show me another.

これはどうも気に入らない。他の(1つ)を見せておくれ

更にまた別の1つも「another[a third]」になります。ただし、最後に残った1つは(それ1つに「限定[特定]」されるので)「the other」と言います。

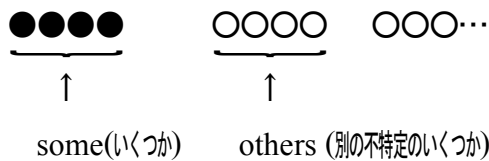
(4) some と the others は (3つ以上あるうちの) 「いくつか」と「残りの全部」。



(ex) Some (people) agreed, but the others disagreed to the plan.

何人かの人賛成したが、残り的人たちは全員その計画に反対した

(5) some と others は (3つ以上あるうちの) 「いくつか」と「別の不特定のいくつか」。



(ex) Some like coffee, others prefer tea.

コーヒーの好きな人もいれば、紅茶のほうが好きな人もいる

others の代わりに some と言うこともできます。

others に the がないということは、(”それだけ”と)「限定[特定]」されないわけで、「別の不特定のいくつか」ということになり、the others とは違い、他にもまだ更に別の不特定のいくつかがある可能性が、この場合残ります。

「~というものもあれば…というものもある」という和訳がよくなされますね。

レクチャー3

代名詞 another の用法。

another は、不定代名詞の中でも特によく狙われます。ここでその用法を整理しておきましょう。

(1) one と another は (3つ以上あるうちの) 「(どれか)1つ」と「one 以外の別のどれか1つ」。

☞これについては「レクチャー2」で説明済み。

(2) one (名詞) after another は「(3つ以上のものが)次から次へと」「続々と」。

(ex) Rescue planes took off one after another from the airport.

=One rescue plane after another took off from the airport.

救助機がその飛行場から続々と飛び立っていった

☞ one after the other は「(2つの物[人]が)次から次へと」。

(3) A is one thing and B is another. は「AとBは異なる」。

=A is different from B

(ex) To know is one thing and to teach is quite another thing.

知っていることと教えることは全く異なる

(4) another + 数詞(又はfew) + 複数名詞(距離・期間など) は「あと(もう)～」。

「複数名詞」の部分には「距離・期間」などを表す名詞が入ることが多いですね。

上記の表現は「数詞+more+複数名詞」で書き換えることもできます。

(ex) He'll be back in another three days. 彼はあと3日たてば帰るよ

=three more days

(5) 「同類」という意味の another.

(ex) If I'm a liar, you're another (liar).

ぼくがうそつきなら君だってうそつきだ

これと同じ用法で「もう一つの物」「もう一人」という another も頻出です。

(ex) There is another to come.

もう1人来る予定だ

I don't like this one. Show me another.

これは気に入らない。ほかのを見せてください

(6) one another は「お互い」。

=each other

(ex) They talked with one another. 彼らは互いに語り合った
=each other

one another, each other は共に「お互い」という意味の代名詞です。したがって前置詞の後に置かれたり、他動詞の目的語にもなれます(ただし主語にはならない)。これらを「おたがいに」という副詞だと勘違いしている学習者が、けっこういます。要注意です。

(7) one + 単数名詞 + or another は「何らかの…」。

=one + 単数名詞 + or the other

=some + 単数名詞 + or other

(ex) We must get over the difficulty (in) one way or another.

何らかの方法で(なんとかして)その困難を乗り越らなければならない

レクチャー4

代名詞を用いた慣用表現。

(1) some + 単数名詞 + or other は「何らかの○○」

(ex) some way or other 何らかの方法で

some day or other いつか

somewhere or other どこかへ[で]

(2) 無冠詞で用いられる somebody(条件文では anybody) は「大物」「重要人物」、逆に nobody は「小物」「無名の人物」という意味になることがある。

また、無冠詞で使う something が「良いこと」「大したこと」「重要人物」「大物」といった意味になることがある。

(ex) If you want to be anybody, you should be diligent.

もしひとかどの人物になりたいのなら、勤勉でありなさい

Jack thinks Mr. Smith is somebody.

ジャックはスミスさんのことを偉い人物だと思っている

Somebodies and nobodies were present at the ceremony.

その式典には有名無名の人々が出席していた

Tim thinks he is something.

ティムは自分のことをひとかどの人物だと思っている

Jane is something of an artist.

ジェーンはちょっとした芸術家だ

☞ something of A で「ちょっとしたA」という意味になる。

(3) Something is wrong with A は「Aはどこか具合が悪い[故障している]」

=There is something wrong with A.

(ex) Something is wrong with this television.

=There is something wrong with this television.

このテレビはどこか具合が悪い[故障している]

☞ちなみに There is something (形) about A は「Aにはどこか(形)なところがある」という意味。両者の区別に注意。

(ex) There is something noble about him.

彼にはどこか高貴なところがある

(4) have nothing to do with A は「Aと全く関係がない」

have much to do with A は「Aと大いに関係がある」

have something to do with A は「Aと何らかの関係がある」

have little to do with A は「Aとほとんど関係がない」

(ex) His failure has nothing to do with you.

彼の失敗は、君とは全く関係がない

(5) make much of A は「Aを重視する、Aを尊重する」

make little[light] of A は「①Aを軽視する ②Aをほとんど理解できない」

make nothing of A は「①Aがさっぱり理解できない ②Aを何とも思わない」

(ex) Many scientists made much of his discovery.

多くの科学者たちは彼の発見を重視した

What do you make of the poem?

その詩をどう解しますか

He made little of his own misfortune.

彼は自分の不幸をほとんど意に介さなかった

I could make nothing of what she said.

私は彼女の言うことが全然わからなかった

- (6) think much[highly] of A は「Aを重視する、Aを尊重する」
think little[lightly] of A は「Aを軽視する、Aを苦しめない」
think nothing of A は「Aを何とも思わない、苦しめない」

(ex) His novel was thought much of by the critics.

彼の劇は批評家にもてはやされた

- (7) see nothing of A は「①A(人)にさっぱり会わない②A(物)がさっぱり分からない」
see much[a lot] of A は「A(人)によく会う」
see little of A は「A(人)にほとんど会わない」

(ex) Do you see much of her?

彼女によく会いますか

- (8) leave nothing to be desired は「全く非の打ちどころがない、申し分ない」
leave little to be desired は「ほとんど非の打ちどころがない」
leave something to be desired は「少々の遺憾な点がある」
leave much to be desired は「遺憾な点が多い」。

(ex) Her acting left nothing to be desired.

彼女の演技は申し分なかった

(9) if anything

①どちらかと言えば [通例文頭で用いる]

(ex) If anything, the novel is not my favorite.

どちらかといえばその小説は私の好みではない

②たとえあっても

(ex) In those days I had little, if anything, money.

その当時私は(たとえあったとしても)ほとんど金を持っていなかった

(10) anything but は「決して～ない」

(ex) I am anything but satisfied with the result.

私は決してその結果に満足していない

(11) do nothing but V[彫]～ は「～してばかりいる」

(ex) The baby did nothing but cry in the cradle.

その赤ちゃんは揺りかごの中で泣いてばかりいた

(12) nothing but A は「Aにすぎない」 =only

(ex) He is nothing but a child.

彼はほんの子供にすぎない

(13) for nothing

①「無料で」

(ex) I got the concert ticket for nothing from my friend.

僕は友人からただでそのコンサートのチケットをもらった

②「無駄に」

(ex) I did not read this book for nothing.

僕はこの本を無駄には読まなかった → 読んだだけのことはあった

(14) good for nothing は「役に立たない」 =useless

good for something は「なんらかの役に立つ」

(ex) There is no one (who is) good for nothing.

何の役にも立たない人などいない

(15) as such

①「そういうものとして、それなりに」 = as+既出の名詞

(ex) She is a great nurse and should be treated as such[=a great nurse].

彼女は素晴らしい看護師であり、そのように扱われるべきである

②[主に否定文で]「それ自体で(は)」

(ex) Money, as such, does not always bring happiness.

金はそれ自体では必ずしも幸福をもたらすとは限らない

③[主に否定文で]「厳密な意味での、というような大層な代物(しろもの)」

(ex) My room isn't a study[書齋] as such.

私の部屋は書齋などという大層な代物なんかではありません

(16) A is not much of B は「Aは大したBではない」

(ex) He is not much of a scholar.

彼は大した学者ではない

レクチャー5

その他の不定代名詞の用法。

(1) all...[代]「全て」

[形]「全ての～」

(ex) All is over.

すべてが終わった、万事休す

All of my friends like Japanese sweets.

私の友人はみんな和菓子が好きです

All of us went to the party.

我々みんなそのパーティへ行った

The wind blew all night. ☞ 形容詞のall。

風は1晩中吹いた

All the villagers know of the tragedy. ☞ 形容詞のall。

村の人々は皆その悲劇を知っている

①上例のように、代名詞の場合、「all」「all + of + the[所有格・these等] + 名詞」「all + of + 代名詞」、形容詞の場合「all+名詞」「all + the[所有格・these等] + 名詞」という形でallは用いられる。これはall以外の不定代名詞(each, either, neither, both, some, any)も基本的には同じだが、**the、代名詞の所有格、指示代名詞の直前(左側)に置けるのはallとbothのみ**。つまりeach, either, neither, some, anyなどは冠詞、代名詞の所有格、指示代名詞の直前に置くことはできない。

- all my loving × each[either] his book
- all the people × some[any] the students
- both the girls ☞ both は、all 同様、冠詞・所有格の左側に置ける。

② all は、数も、量も表せるが、**数を表す場合は「3つ以上の人・物」に用いる**。

(ex) There is a row of trees on both[×all] sides of the bank.

土手の両側に並木がある ☞ 土手の「側」は左右の2つしかないので、これにallは使えない。

③ all が「可算名詞」を指している場合は複数扱い、「不可算名詞」を指している場合は単数扱いとなる。

(ex) There were five people in the room and all were quiet[静かな].

S V

部屋には5人がいて、みんな静かにしていた

All that I need is money.

S V

私がほしいのは金だけだ

④ 「all + 名詞」と「all + (of) + the[所有格] + 名詞」の意味の違い。

1. 「all + 名詞」は「不特定の集団の全て[みんな]」。

(ex) All people are equal.

全ての人平等だ

2. 「all + (of) + the[所有格]+名詞」 「all + of + 代名詞(they など)」は「特定の集団の全て[みんな]」。 ④ ofは「～のうちの」という意味。

(ex) All (of) the people in the ship were dead.

その船の中の人(のうちの)全員が死んでいた

(2) none

(ex) A: "Do you have any children?" お子さんはおありですか

B: "No, I have none." いいえ、1人もいません

=I have no children.

=I don't have any (children).

None of the students answered the question.

学生たちはだれひとりその問題に答えられなかった

①上例のように none も all などと同じく

「none」

「none of the[所有格・these等] + 名詞」 「none of + 代名詞」

の形で用いられ、3つ以上の可算名詞や不可算名詞を受けて「no + 既出の名詞」の意味を表し、その名詞が何もない(訳は「少しも～ない/人も～ない」)ことを示す。

ただし none は、all とは異なり、あくまでも代名詞。形容詞として用いられることはない(つまり「none + 名詞」という言い方はない)。

②直前に自身を具体的に指す[表す]名詞を持つ「主語の none」は、none of A の of A の省略と考えたらいい。

(ex) The committee made five suggestions but none was[were] acceptable.

委員会は5つの提案をしたがどれも受け入れられるものではなかった

※none = none of the suggestions

I looked for some sweets, but there was none left.

私はお菓子を探したが、何も残っていなかった

※none = none of the sweets

ただし直前に受ける名詞をもたない「主語の none」は、no one の意味になる

ことが多い。

(ex) None [=No one] has [have] arrived yet.

まだ誰も来ていない

no one の特徴は、

①「誰も～ない」という意味で、基本的に「人」を表す。

(ex) There was no one in the house.

その家には誰もいなかった

No one has pass the exam.

誰も試験に合格しなかった

☞ none は「人」にも「物」にも使える。

・ nobody は no one の口語的な表現。意味・用法は no one と同じ。

②単独で用いる。none のように、後ろに of A が続くことはない。

× No one of the students have [has] failed.

○ None of the students have [has] failed.

学生たちはだれも落第しなかった

☞ nobody も no one と同じく、常に単独で用いる。

・ nobody は「取るに足らない者」になることもある(逆に somebody は「大物」「重要人物」という意味になることがある)。

(ex) There were somebodies and nobodies at the party.

パーティーには有名無名の人々が出席していた

(3) some と any ☞ (可算名詞を指す場合には) 3つ以上の人・物に対して用いる。不可算名詞も表せる。代名詞、形容詞両方の用法がある。

☞ all 等と同じで、some, any 単独で文中で使われていれば、それは代名詞。「some+名詞」、

「any+名詞」という形で使われていれば、それは形容詞ということになる。

まず some と any の用法をカンタンに表にまとめてみましょう。

	肯定文	疑問文・条件節・否定文
some	いくつか(の)、 何人か(の)、一部(の)	×
any	どんな～も、どれでも いかなる～にせよ[であれ]	[疑問文・条件節] いくつか、いくらか(でも)、何人か(の) 少しでも [否定文] 少しも～ない

(ex) Many people were injured and some were killed.

多くの人がけがをし、何人かは殺された

Let me ask you some questions.

いくつか質問させてください

Lend me some money, if you have any.

金を持っていたら、いくらか貸してください

You can paint any picture you like.

君の好きなどんな絵を描いてもよろしい

㊦「どんな、いかなる」という意味の場合には「any+可算名詞の単数形」で(肯定文で)用いることが多い。代名詞として「any of+A」となる場合では、Aが可算名詞の場合、「A=複数名詞」になる。

(ex) Any of the magazines will do.

どんな雑誌でも結構です

ちなみに「いくつかの」というanyは(元の名詞が可算名詞であれば)複数扱いとなる。

Do you want any of these books?

これらの本のうちで欲しいのがありますか

Do you have any books to read?

読む本が(何冊か)ありますか

Ask her, if you have any doubt.

何か(少しでも)疑問がありましたら彼女にお尋ねください

I don't have any brothers and sisters.

私には兄弟姉妹がいない

=I have no brothers and sisters.

㊦ not～any は no で書き換えられる。

ただし、疑問文・条件文でも意味は肯定文の場合、または肯定の答えを予期する場合は some を用います。

(ex) Will you have some coffee?

コーヒーを飲まないか

If you have some money, you should buy the stock.

お金があるのならその株を買いなさい ④ お金がいくらあることを予期している。

また some の他の用法として、以下(特に①②④)をおさえておくといいいでしょう。

① 「some + 可算名詞の単数形」で「ある」「何らかの」「ある程度の」。

(ex) My sister works in some place in Tokyo.

姉は東京のとある所で働いている

④ 知っていてわざと名前などを伏せる場合には a certain を用いる。

② 「some + 数詞」で「約〇〇」。=about

(ex) Some thirty people were present there.

そこには約30人の人がいた

③ 「some+数・量・程度」で「かなりの、相当な」。

(ex) You will need some courage to swim across the river.

この川を泳いで渡るには相当勇気がいる

④ これによく似た用法で、会話などで「なかなかの」「大した」という意味もある。時に皮肉的にも用いられる(その場合、文頭で用いることが多い)。

(ex) He is some statesman.

彼はなかなかの政治家だ

I call that some play.

あれはすばらしい戯曲だと思う

Some weather for a hike !

ハイキングにはひどい天気だ

④ 「some～ others…」で「～というものもい[あれば…]というものもい[ある]」

(ex) Some (people) are tall and others are not.

背の高い人もあればそうでない人もある

others 以下は省かれることもある。そのような場合には some は「～というもの(人)もいる」と訳すといい。

(ex) Some are not good at mathematics.

数学が苦手な人もいる

もちろん下の例のように some が形容詞的に使われている場合には「～という〇〇もいる」(〇〇に名詞が入る)と訳せばいい。

(ex) Some regions are damp in summer.

夏にじめじめする地域もある

(4) each…[代] 「(2つ以上の人・物に対して用いて)各々、それぞれ」 ☞ each は「単数扱い」の代名詞。
[形] 「(2つ以上の人・物に対して用いて)各々の、それぞれの」

(ex) Each has to do his own duty.

各人はそれぞれの義務を果たさねばならない

Each of the girls was dressed neatly.

どの女の子も小ぎれいな服装をしていた

Each child in the class has received a Christmas present.

クラスの子供たちは1人1人、クリスマスプレゼントをもらった

最後の例文は、形容詞の each の例。形容詞の each は「each+単数名詞」と、直後に単数名詞を取ります。

each と all との違いは、each の場合、全体に関係なく2つ以上のものの1つ1つに関心を向ける感じ。そして every より個別的である点です。

(5) both…[代] 「(2つの人・物に対して用いて)両方」 ☞ both は「複数扱い」の代名詞。
[形] 「(2つの人・物に対して用いて)両方の」

(ex) Both are alive.

2人とも生きている

Both of her children went to London.

彼女の子供は2人ともロンドンに行った

We both like Chinese noodles.

僕たち2人ともラーメンが好きです

There are some trees on both sides of the street.

通りの両側には木が植わっている

最後の例文は、形容詞の both の例。形容詞の both は「both+複数名詞」と、直後に複数名詞を取ります。そして「both+複数名詞」は「each+単数名詞」「either+単数名詞」で言い換えられます。

→ There are some trees on each[=either] side of the street.

ちなみに「both A and B:A(と)B両方とも」という場合の both は接続詞です。

(6) either...[代]「(2つの人・物に対して用いて)①どちらか一方 ②どちらも」⇔ either は「単数扱い」の代名詞。
[形]「(2つの人・物に対して用いて)①どちらか一方の ②どちらの～も」

① either は「肯定文」では「どちらも」、「疑問文・条件文」で「どちらか」という意味になる。ただ、混乱を避けるために(either は文脈によっては「どちらか一方の」と解されることも可能なので)「どちらも」という場合、普通は each や both を用いることが多い。

(ex) I have bought two books. You can have either[=both/ each].
僕は二冊本を買った。君はどちらでも使うことができるよ

There are trees on either[=each] side of the road.

道の両側に木がある ⇔ both を用いた場合「both sides」と、後続の名詞には複数形の s がつく。

Do you know either of the visitors?

(2人の訪問客のどちらかを知っていますか)

ただ、特に以下のように will do とセットで用いる表現は頻出です。

Either will do. どちらでも結構です

☞ Either will do.は「(2つあるうちで)どちらでもいい」、Any will do.は「(3つ以上あるうちで)どれでもいい」の意味。このdoは、「十分だ」「申し分ない」という自動詞のdo。

② 「否定文」では「どちらも～(ない)」という意味になる。つまり「not+either」は「neither」と同じ意味になる。

(ex) I don't like either of the boys.
どちらの少年も好きではない
=I like neither of the boys.

③形容詞の either は「either+単数名詞」になる。

(ex) He can write with either hand.
彼は(左右の)どちらの手でも字を書くことができる

④ちなみに「either A or B:AかBどちらか一方」という場合の either は接続詞。

(ex) Either Ted or Susie is at fault.
テッドかスージーかどちらかが間違っている

(7) neither...[代]「(2つの人・物に対して用いて)両方～ない」 ☞ neither は「単数扱い」の代名詞。
[形]「(2つの人・物に対して用いて)両方～ない」

(ex) Neither of them speaks English.
彼らはどちらも英語を話さない
”Which one do you like?” どちらが好きですか
”Neither.” どちらも好きでない

①先に説明したように「neither = not ~ either」である。

②形容詞の neither は「neither+単数名詞」になる。

(ex) I like neither picture.
私はその絵はどちらも好きではない
=I don't like either picture.

③ちなみに「neither A nor B:AもBどちらも～ない」という場合の neither は接続詞。

(ex) This book is neither interesting nor instructive.
この本はおもしろくもなければためにもならない

最後に every についても補足として説明をしておきましょう(ちなみに every は形容詞であり、不定代名詞ではない)。

every…[形]「(3つ以上の人・物について用いて)全ての～」

① all が「(ある集団全体をひとまとめにして)すべての」という意味であるのに対して、every はより個別的で、(修飾する名詞の)個々の構成要素すべてに次々と関心や注目を向けることを強調する。したがって「あらゆる…、ことごとくすべての…、どの…も」といったニュアンスになる。

② every は形容詞なので、単独で用いられることはない。必ず「every+単数名詞」という形で用いる。

× Every went there.

× Every of the students met with an accident.

○ Every book on the shelf belongs to me.

棚にあるどの本もすべて私のものです

○ Every student passed the examination.

どの学生もみな試験に合格した

○ Every member of the club was present.

クラブの全員が出席していた

③ 「～ごとに(1回)」という意味の every がある。

every + 数詞[few/other] + 期間(秒・分・時間・日・週・年など)

という形で用いるのが特徴です。例をいくつかあげてみましょう。

(ex) every other day 二日ごとに(一日おきに) ☞「2」はotherを用いる。後は単数名詞。

=every second day

every six hours 六時間ごとに(五時間おきに) ☞ このようにeveryの後に序数がかかる

=every sixth hour

場合には、その後の名詞は単数になる。

every four years 四年ごとに(三年おきに)

=every fourth year

every few weeks 2、3週間ごとに

Ⓢ単純に日本語の問題なのだが、「四年ごとに」と「三年おきに」は同じことである。したがって「二日ごとに」は「一日おきに」と同じ意味。

レクチャー6

指示代名詞・冠詞・不定代名詞・疑問代名詞を、所有格と並べて用いることはできない。

指示代名詞… this[these], that[those] など

冠詞 … a, the

不定代名詞… some, any, no など

疑問代名詞… whose, what, which など

指示代名詞や冠詞などを、所有格と並べて用いることはできないということは、以下のような表現はありえないということです。

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| × that[a] my friend | × this your book |
| × my that[a] friend | × the her bag |
| × Jack's some friends | × Mike's this camera |

では「君の(持っている)あの本」「彼女のそのカバン」などと言いたい場合、どのように表現すればいいのでしょうか。

実はそのような場合には、

① of + 所有代名詞

② of + 所有格の名詞 Ⓢ所有格の代名詞は×。

を用いるのです。所有代名詞とは mine, yours, ours, his, hers, theirs などのことで、「〇〇のもの」という意味を表します。

- that book of yours
- the bag of hers
- some friends of Jack's
- this camera of Mike's

以下のような公式として覚えてしまいましょう。

a[an]	}	+ 名詞 + of + 所有代名詞 [所有格(の名詞)]
this[these]		
that[those]		
⋮		

ちなみに所有代名詞というのは「所有格+名詞」のことです。たとえば、

This racket is mine. このラケットはボクのです

と言った場合、mine は my racket で言い換えられますね。

レクチャー7

「no/not～any」「no/not～either」の語順はあるが、その逆はない。

主語を打ち消す場合 any ～ not、either ～ not の形は使いません。

× Anyone doesn't have any doubt about your sincerity.

○ No one has any doubt about your sincerity.

誰も君の誠実さを疑う者はいないよ

× Either of the boys was not trusted by their friends.

○ Their friends did not trust either of the boys.

○ Neither of the boys was trusted by their friends.

友人達は、その少年たちのどちらも信用していなかった

ただし any 以下に修飾語句が付くと any ～ not が可能になります。

(ex) Any student who fails this test will not pass on to the next grade.

このテストに落ちた学生は誰も進級できない

上例の場合、Any student に関係詞節(who～test)が修飾語句としてついているために Any ～ not の語順が可能になっています。

再帰代名詞(oneself)の用法。

(1)動詞や前置詞の後ろで目的語になる。

①主語と目的語が同一(人物の場合に、この再帰代名詞を用いる

(ex) Jane's mother look at herself[×her] in the mirror.

ジェーンの母親は鏡で自分の姿を映してみた ⇨ S(ジェーンの母親)=O(herself)。

ただし、場所を表す前置詞の後では、再帰代名詞を用いなくて普通の人称代名詞を用いることが多いですね。

(ex) I looked about me. ⇨ この about は「～の周辺を[に]」という意味で、場所を表している。

私は自分の周りを見回した

I placed the notebook in front of me.

私は自分の前にノートを置いた

beside oneself [我を忘れて] などのように、比喩的になり場所的意味が希薄になると oneself が用いられます。

②他動詞の目的語に oneself になると(つまり「他動詞+oneself」となると)、その他動詞は自動詞的な意味になる

代表例として、enjoy があげられるでしょう。

enjoy[楽しませる] → enjoy oneself [自分自身を楽しませる ⇨ 自分が楽しむ]

このようなもので、問題としてよく問われる表現をあげてみましょう。

- | | |
|------------------------------|------------------|
| 1. enjoy oneself | 「楽しむ」 |
| 2. present oneself | 「現われる」 =appear |
| 3. content oneself | 「満足する」 |
| 4. excuse oneself | 「言い訳する」 |
| 5. occupy oneself in[with] A | 「Aに従事する、Aで忙しい」 |
| 6. seat oneself | 「座る」 =sit down |
| 7. lay oneself | 「横になる」 =lie down |
| 8. raise oneself | 「身を起こす」 =rise |

9. kill oneself 「自殺する」 =suicide
10. make yourself at home 「くつろぐ」
11. help yourself to A(飲食物) 「Aを自由に食べる[飲む]」
12. absent oneself from A 「Aを休む」
13. apply oneself to doing～ 「～することに没頭[専念]する」
=devote oneself to doing～
=dedicate oneself to doing～
14. History repeats itself. 「歴史は繰り返す」
15. find oneself in[with] A(状態・場所) 「気がつくとAにいる」
16. pride oneself on A 「～を自慢する」
=take pride in A
=be proud of A
17. adapt[adjust] oneself to A 「Aに順応[適応]する」 ☞この oneself は省略可。

③ 「前置詞+oneself」という形で、決まり文句的によく問題で問われるもの

1.by oneself 1. 「一人で、単独で」 =alone

(ex) She is living in the house by herself.

彼女はひとりでその家に住んでいる

2. 「独力で」 =without help ☞この意味では for oneself と同じだが、for oneself の場合、「自分の利益のために」といった意味合いが強い。

2.for oneself 1. 「独力で」

(ex) Do it for yourself.

自分で[独力で]やりなさい

2. 「自分のために」

(ex) He built a new house for himself.

彼は自分が住むための家を新築した

3.to oneself 1. 「自分だけに[で]」

(ex) have[keep] A to oneself Aを独占する

leave A to oneself Aを独りぼっちにする

=leave A alone

2. 「(自分の)心の中に[で]」

(ex) keep A to oneself Aを言わないでおく

=leave A unsaid
say A to oneself Aだと思ふ

4. come to oneself 「意識を取り戻す、正気[本心]に立ち返る」
=come to one's senses

5. in oneself 「それ自体」 ㊦英文の中では in itself [themselves] の形で用いる。
(ex) Making money is not evil in itself.
金もうけその事自体は悪ではない

6. of[by] oneself 「ひとりでに」 ㊦英文の中では of itself [themselves] の形で用いる。
(ex) The tree fell down of[by] itself.
その木はひとりでに倒れた

7. between ourselves 「ここだけの話だが」
(ex) This is between ourselves.
これはここだけの話ですよ

8. in spite of oneself 「思わず」
(ex) He laughed in spite of himself.
彼は思わず笑ってしまった

9. beside oneself (with A[感情を表す名詞]) 「(Aで)我を忘れて」
(ex) He was almost beside himself with joy[fear].
彼はうれしさ[恐怖]でほとんど我を忘れた

④補語になることもある ㊦あまり一般的な用法ではない。

(ex) Jack was not himself lately.
このところジャックは彼らしくなかった

(2)強意用法。

①S・O・Cの後において、その意味を強調する

(ex) I myself saw it.
僕はこの目でそれを見た

目的語の代わりに oneself を用いて強調する用法もあります。

(ex) She scolded Bob and myself for being late.

彼女は遅れたとって、ボブだけでなく私までしかった

上の英文では、me と本来はすべきところを myself と表現することで「私」を強調しています。

② 「be動詞 + 抽象名詞 + itself」で「とても～だ」という意味になる

この表現は、「be動詞 + all + 抽象名詞」「be動詞 + very + 形容詞」で言い換えることができます。いくつか例をあげてみましょう。

(ex) Nancy is kindness itself. ナンシーはとても親切だ

=Nancy is all kindness.

=Nancy is very kind.

be happiness itself とても幸せだ =be all happiness

=be very happy

be curiosity itself 大変好奇心が強い =be all curiosity

=be very curious

be interest itself とても興味がある =be all interest

=be much interested

be simplicity itself とても単純な =be all simplicity

=be very simple

☞抽象名詞とは…性質・状態・動作・感情・学問・主義・運動・病気などのような具体的な目に見える形がない、まさに抽象的な概念を表す名詞。

疑問詞(疑問代名詞・疑問副詞)の用法に関して。

(1) 疑問代名詞(who, what, which)は文の主要素(S・O・C)になれるのに対して、
疑問副詞(when, where, why, how)は文の主要素(S・O・C)になれない点に注意。

例外その1: when が代名詞として, until[till], since などの前置詞とともに用いられることもある。この場合、前置詞は文尾に置かない。

(ex) Till when can you stay here?

いつまでここに滞在できますか

例外その2: where が疑問代名詞として前置詞の目的語になることもある。この場合は、前置詞は文尾に置くのがふつう。

(ex) Where are you from?

ご出身はどちらですか

例外その3: 疑問副詞の中で、how はC(嚮)になることができる。

(ex) How is your brother?

お兄さんはいかがですか

(2) 疑問代名詞は関係代名詞同様、後ろに不完全な文[構造]がくるのに対し、疑問副詞の後ろには関係副詞同様、後ろには完全な文[構造]がくる。

《演習》 () made him so angry?

- ① What ② Why ③ How ④ About what

【解答・解説】

意味は「なぜ彼はそんなに怒ったの」だが、空欄の後ろが不完全な文(いきなり動詞の made で始まっている。つまり主語がない)なので、疑問副詞の why は入れない。

正解は①の what。「何が彼をそんなにも怒らせたのか」が直訳になる。

(3) 「How～?」 と 「What～?」 の使い分けがよく問われる。

①What do you think[make] of A? 「Aをどう思いますか」
=How do you like A?

(ex) “What[×How] did you think of the movie?” あの映画をどう思った?

“It was too boring for me.” ぼくには退屈すぎたね

“How[×What] do you like your new suit?” 新しいスーツはどうですか

“Very much.” とても気に入っています

◎ちなみに How do you like A?には「A＝飲食物」の場合、「Aをどう(調理)しますか」と、調理(の仕方)の好みを問う表現もあり、こちらも要注意。

(ex) “How[×What] do you like your coffee?” コーヒーはどう召し上がりますか

“Just cream, please.” クリームだけにしてください

②How do you spell A? 「Aをどう綴りますか?」

What do you call A? 「Aをなんと^つ言いますか?」

(ex) “What[×How] do you call this in English?” これを英語ではどう言います?

“We call it a 'screwdriver'.” スクリュードライバー[ねじ回し]と言います

③What do you say to doing～? 「～するのはどうですか」

(ex) “What[×How] do you say to going to the movie?” 映画に行くのはどう?

“I'd love to.” 行きたいわ

④What is A like? 「Aはどんなものであるのか」

What does A look like? 「Aはどんなふうに見えるのか」

(ex) What[×How] is the weather in Nagoya like?

名古屋の天気はどうですか

⑤その他

(ex) How[×What] was the weather during your trip?

旅行中の天気はどうでしたか

(4) What を用いた頻出の慣用表現。

① What ~ for?

1. 「なぜ、なんのために」

(ex) What did he kill himself for ?

なぜ彼は自殺したのですか

=Why did he kill himself ?

=How come he killed himself ? ☞ how come を用いると、直後は平叙文(S+V)の語順になる!

“I’d like you to stay with me here.” ぼくとここに残ってほしい

“Oh? What for ?” え? なんのために ☞ For what? とは言わない。

2. 「どんな目的で」

(ex) What’s this old lamp for?

この古いランプは何に使うのですか

② What is A like? 「Aはどんなものであるのか」

(ex) What is your new job like?

あなたの新しい仕事はどうですか

☞この構文は、Aの部分が仮主語になったパターンも大学入試などでは頻出。

(ex) You don’t know what it is like to be really poor.

本当に貧乏であるということがどんなものかお前には分からない

上の例文でも、what の直後の it は仮主語で to be really poor が真主語であり、Aにあたる。

③ What if S+V~?

1. 「~ならどうなるだろうか」 [提案・問いかけ・不安]

☞What will[would] happen if S+V~ が元々の形[表現]だったと見るといい。

if 節は should+V[願形]~、つまり仮定法になることがある。

(ex) What (would[will] happen) if my parents should die?

もし万一両親が死んでしまったらどうなるんだろう

What if it rains?

雨が降ったらどうするの

What if you move the desk a little?

机を少し動かしたらどうなるだろうか[動かしてみたら]

2. 「たとえ～だとしても、それがどうしたというのだ」 [修辞疑問]

④ What does it matter even if S+V～? が元々の形[表現]だったと見るといい。if節は仮定法にならない。

(ex) What (does it matter) (even) if Jim believes the rumor?

たとえジムがその噂を信じるとしてもかまうものか

④ What is S all about? 「Sはいったい何(について)なのか」

(ex) What is the story[letter] all about ?

それはいったい何の話[手紙]ですか

What's it all about?

人生って何なの

④ 「what S is all about: Sにとって(ついて)何より大切なこと」という表現もある。この what は関係代名詞と見た方がよい。

(ex) Winning is what baseball is all about.

勝つことが野球にとって何より大切なことだ

⑤ So what? 「だから何だというのだ」

「そんなことどうだっていいじゃないか」

⑥ What's new? 「やあ、変わったことないかい」

「どうしてる」

=What's up (with you)?

=How are you?

⑦ What do you say to A/ doing～? 「Aは／～するのはどうです?」 [提案]

(ex) What do you say to going for a drive?

ドライブはいかがですか

④ to は前置詞!

=How about going for a drive?

⑧ What become of A ? 「Aはどうなる」

④ 「心配・困惑」を表す表現。

A = 「人」の場合、Aには、「かつての知り合い・有名人」等が入る。

(ex) What will become of the world in 100 years?

100年後の世界はどうなるだろうか

Do you know what has become of him?

彼がどうなったか知っているかい

レクチャー10

天候・時間・距離・漠然とした状況などの it に関して。

代名詞の it には、「それ」という、前出の特定の物を受ける用法以外に、非人称の it というのがあります。

英語の文は主語が必要なので、(明確な意味はないが)文としての形式を整えるために it が主語として用いられることがあるのです。そのような it のことを非人称の it と呼びます。非人称の it は、時間・距離・天候・温度・明暗・季節などを述べる文の主語になります。日本語に直すときには、こうした it は訳さないのがふつうです。例をあげてみましょう。

(ex) It's seven o'clock. [時]

7時です

It's ten miles from here. [距離]

ここから10マイルです

It's fine today. [天候]

今日は良い天気です

It's warm here. [温度]

ここは暖かい

It's dark outside. [明暗]

外は暗い

It's summer now. [季節]

今は夏です

これらのうち「漠然とした状況」を表す it は決まり文句的なものが多く、大学入試などでも狙われやすい it の 1 つです。例文をいくつかあげておきましょう。

(ex) Take it easy.

気楽に行こうよ(やろうよ)

At last I've made it.

ついに成功したぞ

💡 make it で「成功する」「間に合う」「たどりつく」等といった意味になる。

There was nothing for it but to tell a lie.

ウソをつくよりほかに仕方がなかったんだ

💡 There is nothing for it but to do[原形]〜 で「〜せざるを得ない」という意味になる。

That's it.

その通り!

I can't help it.

仕方がない

=It can't be helped.

レクチャー11

it を用いた重要構文。

(1) It seems[appears] that S + V〜. 「〜のように見える、思われる」

(ex) It seems (to me) that Jack is the key person.

(私には)ジャックが鍵を握っている人物のように見える

=It appears (to me) that Jack is the key person.

(2) It happened[chanced] that S + V〜. 「たまたま〜した」

(ex) It happened that I met him on my way to the station.

駅に行く途中で偶然彼に会った

=It chanced that I met him on my way to the station.

(3) It turned out that S + V〜. 「結果として〜だとわかる」

As it[things] turned out, S + V～. 「結果として(結局のところ)、～だった」

(ex) It turned out (that) I couldn't do so.

私にはそうすることができないことがわかった

As it[things] turned out, she was never there.

結局のところ彼女はそこにはいなかった

(4) It occurs to A(人) { that S + V～.
[strikes] to do[原形]～. 「～がAの頭[心]に浮かぶ」
疑問詞節.

㊦「A(物事) occur to B(人):AがBの頭に浮かぶ」が下敷きとなっている仮主語構文。

(ex) It occurred to me that he might be the criminal.

=It struck me that he might be the criminal.

※strikeの活用は strike-struck-struck。

=It flashed across my mind that he might be the criminal.

彼がひょっとすると犯人かもしれないという考えが私の心に浮かんだ

(5) It dawn on A(人) that S + V～. 「～がAに次第にわかってくる」

㊦「A(物事) dawn on B(人):AがBの頭に次第にわかってくる」が下敷きとなっている仮主語構文。

(ex) It dawned on me where I had seen the woman before.

その女性と以前どこで会ったのかが(私は)次第にわかってきた

(6) It follows that S + V～. 「～ということになる」

(ex) It follows from what she says that Mr. James is guilty.

彼女の言うことから判断すると、ジェームズ氏は有罪ということになる

(7) what it is like to do[原形]～. 「～するのがどういうものであるのか」

㊦「what is A like:Aはどんなものであるのか」が下敷きとなっている仮主語構文。to do～の部分が真主語。

(ex) You don't know what it is like to be poor.

お前には貧乏であることがどんなものかわからないのだ

(8) It is no use[good] doing～. 「～しても無駄だ」

㊦ It は仮主語、doing～の部分が真主語。

(ex) It is no use crying over spilt milk.

こぼれてしまったミルクのことを嘆いても無駄だ → 覆水盆に返らず
(後悔先に立たず)

(9) It doesn't matter whether S + V ~ (or not). 「~かどうかは重要ではない」

=It makes no difference whether S + V ~ (or not).

☞ It は仮主語。whether 節が真主語。

(ex) It doesn't matter whether he will consent or not.

彼が同意するかどうかは問題ではない

=It makes no difference whether he will consent or not.

(10) It is no wonder that S + V ~. 「~なのも無理はない」

(ex) It is no wonder that she should think of him as rich.

=No wonder she should think of him as rich.

=It is not surprising that she should think of him as rich.

=It is natural that she should think of him as rich.

彼女が彼のことを金持ちだと思ったのも無理はない[不思議ではない]

(11) It is not too much to say that S + V ~. 「~だといっても過言ではない」

(ex) It is not too much to say that Tiger Woods is a genius.

=It is safe to say that Tiger Woods is a genius.

タイガー・ウッズは天才だといっても過言ではない[差し支えない]

(12) It goes without saying that S + V ~. 「~なのは言うまでもない」

(ex) It goes without saying that he succeeded in the entrance exam.

=Needless to say, he succeeded in the entrance exam.

彼が入学試験に合格したのは言うまでもない

(13) It won't [=will not] be long before S + V ~. 「まもなく~するだろう」

(ex) It won't be long before she will come.

まもなく彼女がくるだろう

=She will come soon[=before long].

(14) 「(金・犠牲が)かかる =cost」 と 「(時間・労力が)かかる =take」。

① It costs [A(人)] B(金・犠牲) to do[原形]～. [Aが]～するのにBかかる

(ex) It cost me twenty dollars to repair the shoes.

その靴を修理するのに20ドルかかった

◎活用は cost-cost-cost。上例は cost に3単現のsが付いていないので過去時制の英文とわかる。

② It takes [A(人)] B(時間・労力) to do[原形]～. [Aが]～するのにBかかる

=It takes B(時間・労力) for A(人) to do[原形]～.

(ex) It took me two hours to read the magazine.

その雑誌を読むのに2時間かかった

レクチャー12

形式目的語の it。

目的語が長すぎるような場合に、本来目的語を置く位置に、仮の目的語[仮目的語、又は形式目的語]、it を置いて、本当の目的語[真目的語]を節の後半に持ってくるという、いわゆる形式目的語[仮目的語]構文というものがあります。その3大代表選手が以下の3つです。

① 「consider[think] O(名) C(形・分・名):OはCだと思ふ[みなす]」

⇒ consider[think] it (形・分・名) $\left\{ \begin{array}{l} \text{to do[原形]～} \\ \text{doing～} \\ \text{C that節等} \end{array} \right.$ 「～するのはCだと思ふ[みなす]」

(ex) The politician considered it rude to say such a thing in public.

その政治家は、そんなことを人前で言うのは失礼だと思った

② 「make O(名) C(形・分・名):OをCにする」

⇒ make it $\frac{\text{(形・分・名)}}{\text{C}}$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{to do[原形]} \sim \\ \text{doing} \sim \\ \text{that節等} \end{array} \right.$ 「～するのをCにする」
Ⓢ make の場合、Cに入る分詞は、過去分詞のみ。

(ex) The computer system will make it easier to do our business.

そのコンピュータシステムのおかげで業務がより容易になるだろう

③ 「find O(名) C(形・分・名):OはCだと思う[分かる]」

⇒ find it $\frac{\text{(形・分・名)}}{\text{C}}$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{to do[原形]} \sim \\ \text{doing} \sim \\ \text{that節等} \end{array} \right.$ 「～するのをCだと思う[分かる]」

(ex) They found it very hard going back to their basecamp in the storm.

その嵐の中をベースキャンプに戻るのは大変苦勞だった

更にこの形式目的語構文には慣用的なものもあり、それらは文法・作文問題で頻出です。以下のものはしっかり覚えましょう。

(1) see [to it] that S + V ~ 「～するよう取り計らう、気をつける」

(ex) I'll see to it that there is no such mistake again.

私はそんなまちがいが二度と起こらないように気をつけよう

(2) take it for granted that S + V ~ 「～するのを当然とみなす」

(ex) I took it for granted that my close friend would agree.

私は親友が同意するのは当たり前だと思った

(3) make it a rule[habit] to do[原形] ~ 「～するのを習慣にする」

※実際にはこの表現は古めかしい言い方とされる。

(ex) I make it a rule to go for a walk before breakfast.

私は朝食前に散歩することになっている

(4) have it that S + V ~ 「～だと言う」

(ex) Rumor has it that she was an actress when young.

うわさでは彼女は若いころ女優だったそうだ

(5) depend on it that S + V ~ 「～するということを当てにする」

(ex) You should not depend on it that your parents offer financial aid.

君は両親が財政的な援助をしてくれるのを当てにすべきでない

(6) take it that S + V ~ 「～だと思う」

(ex) I take it that she is the criminal.

私は彼女が犯人だと思う

(7) owe it to A that S + V ~ 「～する(した)のはAのおかげだ」

owe it to A to do[願] ~ 「Aに対して～する義務を負っている」

(ex) You owe it to your friends that you have been able to redeem your honor.

君が名誉を回復できたのは友人たちのおかげです

We owe it to society to make our country a better place.

我々は社会に対してこの国をよりよい所にする義務がある

④ これらは、目的語が長すぎるからというよりは、直接後ろに節などを目的語を取ることができないので、仮の目的語 it を立てて、その後に本当の目的語を置いたというものが多い。

レクチャー13

「There ④ + ⑤」構文。

(1) There be動詞 + ⑤(名). 「⑤がある[いる]」

(ex) There was a pond in front of the house.

その家の前には池があった

「⑤がある[いる]」という存在を表します。⑤が単数名詞なら be動詞は is[was]、

㊦が複数名詞なら be動詞は are[were]になります。

(2) There 一般動詞 + ㊦(名).

(ex) There lived a little girl in the village.

その村には一人の小さな女の子が住んでいた。

「一般動詞」の部分には「存在」「出現」等を表す(自)動詞が入るのが特徴です。この構文は「疑問文」や「否定文」になれません。

訳す場合には、A little girl lived in the village. と、(There を削って) 元の「S+V」の語順に頭の中で戻してみるといいでしょう。「存在」「出現」などを表す動詞には以下のようなものがあります。

①「存在」などを表す動詞

live「住んでいる」 lie「ある、いる」 stand「立っている、位置している」 follow「続く」 grow「成長する」
exist「存在する」 remain「残っている」等。

②「出現」などを表す動詞

come「来る、現れる」 emerge「現れる」 occur「起こる」 blow「吹く」 take place「行われる」

(3) There seem[appear] to be + ㊦(名). 「㊦がある[いる]かのように見える[思える]」

(ex) There seems[appears] to be someone in the room.

その部屋には誰かいるかのように思える[見える]

「There be動詞 + ㊦(名) : ㊦がある(いる)」と「seem[appear] to V:Vするように見える(思える)」が結びついて、「There seem[appear] to be + ㊦(名)」という形で「㊦がある[いる]かのように見える[思える]」という意味になります。

ちなみに「There seem[appear] to have been + ㊦(名)」と、完了不定詞が使われると、「㊦があった[いた]かのように見える[思える]」となります。

(ex) There seems[appears] to have been disagreement.

意見の不一致があったかのように思える[見える]

これと同じパターンの表現に以下のようなものがあります。

①There used to be + ㊦(名). 「(昔)㊦があった」

(ex) There used to be a school here.

ここには昔学校があった

これは「There be動詞 + ㊦(名)」構文と「used to V:(昔)～だった」が結びついた構文と考えたらいいでしょう。実際、used to be は was[were] と同じで、上例は以下のように書き換えても同じです。

→ There was a school here.

② There is likely to be + ㊦(名). 「㊦がある可能性がある」

(ex) There is likely to be some misunderstanding.

何らかの誤解がある可能性がある

これは「There be動詞 + ㊦(名)」構文と「be likely to V～:～する可能性がある」が結びついた構文と考えたらいいでしょう。

③ There is said to be + ㊦(名). 「㊦があると言われている」

[thought]

[思われている]

[believed]

[信じられている]

(ex) There is said to be a superstition in this village.

この村には1つの迷信があると言われている

これは「There be動詞 + ㊦(名)」構文と「be said[thought/ believed to V～:～すると言われて[思われて/信じられて]いる」が結びついた構文と考えたらいいでしょう。

(4) 「There ㊶ + ㊦」構文の準動詞形。

「There is ㊦(名)」構文においては、be動詞が準動詞(不定詞・分詞・動名詞)になった場合、(本来主語ではない)there が意味上の主語の位置に置かれます。

① be動詞が不定詞になった場合、不定詞は「for A to do[願]～」と、「for A」 という形でその意味上の主語を表すので、there がAの位置に置かれ、

for there to be (名)～

という構造になります。

(ex) It is natural for there to be some problem about it.

それについて何らかの問題点があるのは当然だ

また、expect, want, would like など、特定の動詞の場合、

S+V(expect, want···)+O+to do[願]~
C

と「There is ㊟(名)」構文が結びついて

S+V(expect, want···)+there+to be+A(名)~
O C

という構造になることがあります。

(ex) Be careful. I don't want there to be any problem.

慎重に。いかなる問題も起こってほしくないのです

上例は「want O to do[願]~:Oに~してほしい」と「there be動詞+㊟(名)」構文がドッキングしたものです。

- ② be動詞が動名詞になった場合、動名詞は、自身の直前にその意味上の主語を置くので、

there being (名)~

という構造になります。

(ex) I didn't say anything about it because of there being his wife.

彼の奥さんがいたので私はそのことについては何も言わなかった

- ③ be動詞が分詞になった場合も、その意味上の主語は自身の直前に置くので、

there being (名)~

という構造になります。

(ex) There being no bus service, I had to take a taxi.

バスがなかったので、私はタクシーに乗らなければならなかった

(5) There be動詞 + ㊟(名) + 分詞～. ～している[される] ㊟がいる

「There be動詞 + ㊟(名)」の後ろに現在分詞や過去分詞がついて、後ろから㊟(名)を修飾する構造になる英文があります。

(ex) There is a page missing.

1 ページ抜けている

There were two people killed in the accident.

その事故で2人の人が死んだ

その特徴は、㊟と分詞との間に「主語と述語の(意味)関係」が成立する点です。
上例でも

A page is missing.

Two people were killed.

という意味関係を読み取ることができます。

したがってこのタイプの構文の文法問題などにおける現在分詞と過去分詞の入れ分け方は、修飾する㊟(名)に対して、

① 「～している[能動]」と訳せれば ☞ 現在分詞(doing～) を用いる

② 「～(させ)られた[受動]」と訳せれば ☞ 過去分詞(p.p) を用いる

と判断するといいでしょう。

(ex) There is a man waiting for him to come here.

彼がここに来るのを待っている男性がいる ☞ a man と wait は「能動」の意味関係。

There is a little milk left in the cup.

コップの中にはミルクが少し残っている ☞ milk と leave [残す] は「受身」の意味関係。

(6) There is a rumor that S+V～. ～という噂がある

この構文は「that S+V～」は同格節で、a rumor を修飾しています。

(ex) There is a rumor that he will quit the job.

彼はその仕事を辞めるだろうという噂がある

この「～という噂がある」には以下のようなイコール表現があります。

- ① It is rumored that S+V～.
 (ex) It is rumored that he will quit the job.
- ② S is rumored to V[願形]～.
 (ex) He is rumored to quit the job.
- ③ Rumor has it that S+V～.
 (ex) Rumor has it that he will quit the job.
- ④ Rumor says that S+V～.
 (ex) Rumor says that he will quit the job.

(7) 「There be動詞 + ㊸(名)」を用いた慣用表現。

- ① There is no point[sense / use / good] (in) doing～. 「～しても無駄だ」
 =It is no use[good] doing～
 =No point[sense] (in) doing
 =What is the use of doing～?
 (ex) There is no point crying over spilt milk.
 こぼれたミルクを嘆いても仕方がない → 覆水盆に返らず
- ② There is no doing～. 「～できない」
 =It is impossible to do[願形]～
 (ex) There is no denying the fact that you told a lie to us.
 君が我々に嘘をついたという事実は否定できない
- ③ There is nothing for it but to do[願形]～. 「～するより仕方がない」
 (ex) There was nothing for it but to accept the offer.
 その申し出を受け入れるより仕方がなかった
- ④ There is no need to do[願形]～. 「～する必要はない」
 (ex) There is no need for you to hurry. 急ぐ必要はない
 =You have no need to hurry.

=You don't need to hurry.

- ⑤ There is no[little, some] doubt {
about A.
that S+V~.
if [whether] S+V~.

「A/~について全く疑問の余地がない」

Ⓛ little なら「ほとんど疑問の余地がない」、some なら「(いくらかの)疑問の余地がある」となる。

(ex) There is no doubt about his innocence.

彼の無実は間違いない

There is some doubt whether the story is true.

その話が本当かどうか疑問がある